

## 事例から見る幼小連携「交流活動」の意義

### － 幼児の人間関係の構築に注目して－

谷 口 聖

#### 1. はじめに

近年、少子化や生活環境の変化によって、子どもの人間関係が希薄化していることの問題点が指摘されている。河崎らによれば、「少子化、地域の仲間集団の縮小、地域的な子育ての共同の衰退などにより、生活と遊びの中で実体験を通して自然や社会関係を学ぶ環境が衰退しつつある。」<sup>1)</sup>と指摘され、社会の変化に伴う子どものコミュニケーション力の低下や他者と関わる力の低下が懸念される。河崎らによれば、「情報化社会の急激な進行にともない、子どもたちが抱くなりゆく人間像、つまりは憧れの対象が、身近でリアルな人ではなく、テレビや漫画やインターネットの中で躍動するヒーロー、ヒロインに画一化されていく事態も進行してきた。」<sup>2)</sup>と述べられており、時代の変化に伴い、子どもの姿が大きく変容していることが理解できる。重ねて河崎らは、「リアリティーのある人間関係の希薄化とバーチャルな憧れとが、今日の子どもの育ちの問題を引き起こしている一つの大きな要因であることは間違いないだろう。」<sup>3)</sup>と指摘している。これらの指摘から、改めて幼児期から子どもの人間関係を育む教育活動のあり方を検討する必要性が指摘できるであろう。

幼児期における「人間関係」を育む内容として、幼稚園教育要領（平成29年）「第2章ねらい及び内容」の「人間関係」には、「1 ねらい (1) 幼稚園生活を楽しみ、自分の力で行動することの充実感を味わう。(2) 身近な人と親しみ、関わりを深め、工夫したり、協力したりして一緒に活動する楽しさを味わい、愛情や信頼感を持つ。(3) 社会生活における望ましい習慣や態度を身に付ける。」<sup>4)</sup>と記述されている。これらのねらいを達成させるためには、保育者や同じクラスの子どもの関わりだけでなく、年齢や立場の異なる他者と関わる機会が豊富に提供されることも重要であると考えられる。近年、小一問題を改善して、なめらかな幼小接続を実現する目的として各地で保育所や幼稚園が小学校と密接に連携しながら、様々な教育活動が実践されている。姜は幼小連携の主な活動を「子ども同士の交流」「教員同士の交流や情報交換」「カリキュラムのつながり」の3つに分類している<sup>5)</sup>。これらの活動のうち、子ども同士の交流活動は、幼児

が異年齢で立場の異なる子どもと関わる機会が豊富に提供されることから、なめらかな幼小接続を実現させるためだけではなく、幼児が人間関係を育む重要な機会にもなると考えられる。幼小連携の「交流活動」に関する事例としては、主に小学校への授業見学や「生活科」を通しての学校探検が盛んに行われている。例えば、井上の「幼児が小学校へ行き、幼児が3グループに分かれ、小学1年生の3クラスに順番に各15分程度入室し、授業を見学する」<sup>6)</sup>という実践や、木下の「幼児が小学校へ行き、グループに分かれ、小学1年生が幼児を小学校の様々な場所を案内するといった事例」<sup>7)</sup>といった実践が報告されている。このような交流活動の中で幼児が人間関係を育む経験がもたらさせていると考えられるが、実際にどのようなことが経験されているのだろうか。筆者の幼小連携活動の実践分析によると、「幼稚園の敷地内の畑で5歳児と小学1年生が一緒になってサツマイモを収穫する活動が展開されている。ここでは幼小の子どもが関わることによって、様々な姿が報告されている。例えば、畑にいた芋虫を触れない1年生に対し、幼児が芋虫を掴み、5歳児が1年生の代わりに芋虫を安全な場所へ逃がす姿が報告されている。この事例から、幼児は、年長者である小学生を幼児がサポートすることによって自己有能感が育まれたと示唆された。」<sup>8)</sup>と報告されている。このことから、幼児が小学生と関わることで、人との様々な関わり方に気づき、相手の気持ちを考えて関わり、自分が役に立つ喜びを感じるといった姿も育まれると考えられる。さらに、幼小連携の「交流活動」は単に幼小のなめらかな接続を実現するために効果的であるだけでなく、幼児が異年齢の小学生と関わる経験から、保育内容「人間関係」で述べられている、人と関わる力を育てることにおいて身につく姿を育てることにおいても、有用であることが推測されるのである。

以上の理由から本研究では、幼小連携の「交流活動」が幼稚園教育要領（平成29年）「保育内容・人間関係」の「ねらい」、「内容」を達成させる有用な教育活動であるという視点をふまえ、事例を挙げながら分析することを目的とする。

## 2. 研究方法

**1. 調査対象**：K県S町にある幼稚園5歳児（年長児）青1組35名、青3組35名、小学5年生6名。N大学附属幼稚園5歳児川組24名、小学1年生31名。

**2. 調査日**：2016年10月17日、2016年10月19日。

**3. 調査方法**：2016年10月に実施されたN大学附属幼稚園の幼小連携の交流活動とK県S町にある幼稚園の幼小連携の交流活動を観察対象とした。観察に際しては筆者が幼小の交流活動に参加し、自然観察法の手法を用いて幼児、小学生の双方の行動について特に人間関係の構築に関わると考えられるものを中心に文章で記録した。<sup>9)</sup>この観察記録から幼児の小学生に関わりに注目し、

幼児の行動の中から幼稚園教育要領（平成 29 年）保育内容「人間関係」の「ねらい」, 「内容」と密接に関連すると考えられるものを指摘し, その行動によって「ねらい」や「内容」が達成されている可能性について考察した。

表 1 研究対象者

	日付	参加人数	分析対象者	場所
事例 1	2016 年 11 月 17 日	5 歳児（年長児） 青 1 組 35 名 小学 5 年生 2 名	5 歳児（年長児） A、D、K、T 君 小学 5 年生 H、S 君	K 県 S 町にある H 幼稚園
事例 2	2016 年 11 月 17 日	5 歳児（年長児） 青 3 組 35 名 小学生 5 年生 3 名	5 歳児（年長児） H ちゃん 小学 5 年生 A ちゃん	K 県 S 町にある H 幼稚園
事例 3	2016 年 11 月 19 日	N 大学附属幼稚園 5 歳児川組 24 名 小学 1 年生 31 名	5 歳児（年長児） A、D 君 小学 1 年生 K、N、O 君	N 大学附属 幼稚園
事例 4	2016 年 11 月 19 日	N 大学附属幼稚園 5 歳児川組 24 名 小学 1 年生 31 名	5 歳児（年長児） 2 名。 小学 1 年生 2 名	N 大学附属 幼稚園

### 3. 結果と考察

#### (1) K 県 S 町の幼小連携交流活動の記録の分析

観察記録 事例 1 「小学 5 年生のお兄ちゃん、お姉ちゃんが幼稚園にやって来た」 2016/10/17  
事例 2 は、K 県 S 町にある H 幼稚園 5 歳児と同じく K 県 S 町にある Y 小学校の 5 年生の幼小連携交流活動の事例である<sup>10)</sup>。

事例の参加人数として、K 県 S 町にある幼稚園 5 歳児青 1 組 35 名、小学 5 年生 2 名。

分析の対象者として 5 歳児（年長児）A、D、K、T 君。小学 5 年生 H、S 君。

幼稚園の 5 歳児の部屋に着くと、小学 5 年生は 4 人ずつ各部屋に分かれた。小学 5 年生が部屋に入ると、5 歳児は小学 5 年生を遠巻きに見ていた。小学 5 年生とおしゃべりしたいが、なかなか喋りかけずにいる様子だ。

すると人懐っこい①5 歳児 A 君と K 君が「トランプしようよ。」と小学 5 年生に声をかける。「いいよ、やろう。ババ抜きしよう。」と小学 5 年生。ババ抜きが始まり盛り上がっている様子。「ババ引きたくないわー」と 5 歳児の A 君。どうやら勝負は終盤に差しかかり勝負が決まってくる大事な場面。「トランプを取る時は、ババを取らんように相手の顔を見たらいいんやで。」と A

ドバイスをする小学5年生のS君。「わかった。ありがとうS君。」と②慎重に取るトランプを選ぶ5歳児A君の様子に「よしよし、その調子や」と小学5年生のS君は5歳児A君に言った。9時20分、どんどん登園してくる5歳児がいつもの様子で教室に入って来ると、教室に小学5年生がいる様子に「うわ、誰かおる。」と教室の入り口でびっくりした様子で教室の前で固まる5歳児や、「昨日来ると言っていた小学生？」と5歳児T君は小学5年生に話かける様子があった。小学5年生のH君は「そうやで。キミも一緒にババ抜きする？」と話かける5歳児に対して遊びに誘う様子があった。

9時30分、教室に突然音楽が流れた。突然動き出す幼児達に「え、なにがあるん。」と戸惑う小学5年生。どうやら、放送の音楽が流れると片づけの時間になるようだ。困惑気味な小学5年生も幼児と一緒に片づけを進める。積木を片づけようとしていた小学5年生のS君は、積木をどこに直したらいいのか分からなく困っている様子である。すると③「積木はここに直したらいいんやで。」と言い積木入れを指差す5歳児のD君。「あっ、ここか、ありがとうな。」と小学5年生S君。すると5歳児D君は笑顔で返事をした。

## (2) 考察

下線部①の、5歳児A君とK君が「トランプしようよ。」と小学5年生に声をかける様子から小学生という身近な人と親しみを持ち関わりを深めている。また、「トランプしようよ。」と5歳児のA君とK君が小学5年生に声をかける様子から進んで人と関わる様子があり、幼児が異年齢である小学生に対して積極的に関わろうとする姿勢を示している。吉田は異年齢保育について「他者と関わる力が育っている。譲り合う。コミュニケーション力や調整力を育てている。」<sup>11)</sup>と指摘している。このことから異年齢の子ども同士の関わりは、人間関係を育む大きな機会を与えるものであることが示唆され、本事例の幼児と小学生の関わりもその機会となっていることが窺える。以上の先行研究からの指摘や本事例からも示唆されるように、幼小交流活動が保育内容「人間関係」のねらいの「(2) 身近な人と親しみ、関わりを深め、工夫したり、協力したりして一緒に活動する楽しさを味わい、愛情や信頼感をもつ。」<sup>4)</sup>につながる関わりであると考えられる。

下線部②の、慎重に取るトランプを選ぶ5歳児A君の様子から、トランプに勝つという目的を見だし、小学生の「トランプを取る時は、ババを取らんように相手の顔を見たらいい」というアドバイスの良さに気付き、参考にしながら「ババ抜き」で「ババ」を引かないためにはどのようにすれば良いのか考え、工夫し、小学生と協力し合いトランプ遊びを進めていることが理解できる。山本らによれば「異年齢保育の中で、安心感とできた達成感・自信をもち、次第に集団の中でも年長児の姿に憧れたり模倣したりしながら活動意欲が高まり自己主張もするようになっていった。」<sup>12)</sup>と指摘している。このことから異年齢の子ども同士の関わりは、人間関係を育む大きな機会を与えるものであることが示唆され、本事例の幼児と小学生の関わりもその機会とな

っていることが窺える。以上の先行研究の指摘や本事例から理解できるように、幼小交流活動が保育内容「人間関係」のねらいの「(2) 身近な人と親しみ、関わりを深め、工夫したり、協力したりして一緒に活動する楽しさを味わい、愛情や信頼感をもつ。」<sup>4)</sup>、内容の「(7) 友達によさに気づき、一緒に活動する楽しさを味わう。」<sup>13)</sup>、「(8) 友達と楽しく活動する中で、共通の目的を見だし、工夫したり、協力したりなどする。」<sup>14)</sup>につながるものであると考えられる。この活動では5歳児にとっては小学5年生という「異年齢」と関わりを経験としていることになる。異年齢の子どもの関わりは、地域の仲間集団の縮小化における人間関係の希薄さが指摘される現代では、貴重な体験であり5歳児の人との関わりを深める上で極めて重要なものになっていると考えられる。

下線部③の、予期せぬことが起こり戸惑っている5年生を見て5歳児が「積み木はここに直したらいいんですよ。」と声かけをしている様子から、積み木を片付けるという共通の目的を見だし、5年生と協力し、活動を進めていることが窺える。また、5年生の戸惑う様子をみた5歳児が助言することで関わりを深め、思いやりをもって接していることも理解できる。吉田は「異年齢間の交遊関係を広げ・深めている。信頼関係が育つ。力を合わせる。他者に優しさ、素直さを持てる。」<sup>15)</sup>と指摘している。本事例は特に吉田の指摘する異年齢交流における他者への優しさを育むことに関連していると考えられる。以上の先行研究からも示唆されるように、幼小交流活動が保育内容「人間関係」のねらいの「(2) 身近な人と親しみ、関わりを深め、工夫したり、協力したりして一緒に活動する楽しさを味わい、愛情や信頼感をもつ。」<sup>4)</sup>、内容の「(10) 友達との関わりを深め、思いやりをもつ。」<sup>16)</sup>につながるものであると考えられる。

## (2) K県S町の幼小連携交流活動の記録の分析

観察記録 事例2 「5歳児Hちゃんと小学5年生Aちゃんの関わり」 2016/10/17

事例2は、K県S町にあるH幼稚園5歳児と同じくK県S町にあるY小学校の5年生の幼小連携交流活動の事例である<sup>17)</sup>。

事例の参加人数として、K県S町にある幼稚園5歳児青3組35名、小学5年生2名。

事例の対象者として5歳児（年長児）Hちゃん、小学5年生Aちゃん。

5歳児の部屋で「今から裏山に集まって下さい。」と小学5年生が指示を出す。5歳児は帽子をかぶり続々と教室を後にする。幼稚園の階段を降り、外靴に履き替え裏山を目指す5歳児。その5歳児の様子を見守るように後に続く小学5年生の様子。

裏山に行くには道中にある階段を登る必要がある。この階段は草の生い茂る斜面をくり抜いたような幅の狭い階段で、舗装はされているものの、うっかりしていると足を滑らせてしまいそうな階段である。

「足元に気を付けてね」と小学5年生のAちゃん。①「うん。」と笑顔で返す5歳児Hちゃん。

どうやら、裏山に行く道中にある階段に登る最中であるようだ。小学5年生Aちゃんは、階段に登る5歳児のHちゃんの手を引き優しくかかわる様子があった。

H幼稚園の裏山に集まった子ども達。小学5年生がたくさんの5歳児の前に立ち、これから行われる「だるまさんが転んだ」の遊びの説明をしていた。緊張と楽しさが入り混じる雰囲気である。5歳児Hちゃんも緊張の面持ちで説明に聞き入っていた。

「だるまさんが転んだ」の説明が終わり、始めに小学5年生が鬼になりゲームが始まった。横に一直線に並ぶように指示を出す小学5年生。真っ直ぐに並べていない5歳児に対して「こう横に真っ直ぐに並ぶんだよ」と両手を広げる小学5年生の様子があった。その中に、ずっとそばにいて欲しいのか、②小学5年生のAちゃんの手を離さない5歳児Hちゃんの姿があった。5歳児Hちゃんの気持ちに答えるように、そばにしている小学5年生Aちゃんの姿があった。

## (2) 考察

下線部①の、小学5年生Aちゃんに対し、「うん。」と笑顔で返す5歳児Hちゃんの姿から、異年齢である小学生に対し、親しみを感じ、関わりを深めている様子が窺える。また、5歳児Hちゃんの姿から、小学5年生Aちゃんと共に過ごす喜びを味わっていることが理解できる。吉田は異年齢保育について「人と関わる楽しさを感じるようになる。」<sup>18)</sup>と指摘している。このことから異年齢の子ども同士の関わりは、人間関係を育む大きな機会を与えるものであることが示唆され、本事例の幼児と小学生の関わりもその機会となっていることが窺える。以上の先行研究からの指摘や本事例からも示唆されるように、幼小交流活動が保育内容「人間関係」のねらいの「(2) 身近な人と親しみ、関わりを深め、工夫したり、協力したりして一緒に活動する楽しさを味わい、愛情や信頼感をもつ。」<sup>4)</sup>、内容の「(1) 先生や友達と共に過ごすことの喜びを味わう。」<sup>19)</sup>につながるものであると考えられる。

下線部②の、小学5年生のAちゃんの手を離さない5歳児Hちゃんの姿から、小学5年生のAちゃんに対し、信頼を抱きつつ、小学5年生のAちゃんを心の支えにし、活動をやり遂げようとする姿が行動として表れているのではないかと考えられる。吉田は異年齢保育について「交遊関係を広げ深めている。信頼関係が育つ。」<sup>15)</sup>と指摘している。本事例は特にこの指摘にある異年齢交流における信頼関係を育むことに関連していると思われる。以上の先行研究からの指摘や本事例からも示唆されるように、幼小交流活動が保育内容「人間関係」のねらい「(2) 身近な人と親しみ、関わりを深め、工夫したり、協力したりして一緒に活動する楽しさを味わい、愛情や信頼感をもつ。」<sup>4)</sup>、「(4) いろいろな遊びを楽しみながら物事をやり遂げようとする気持ちをもつ。」<sup>20)</sup>につながるものであると考えられる。

### (3) N 大学附属幼稚園の幼小連携の交流活動の記録の分析

観察記録 事例3「サツマイモほり」 2016/10/19

事例3は、N 大学附属幼稚園 5 歳児と N 大学附属小学校の小学 1 年生の幼小連携交流活動の事例である。<sup>21)</sup>

事例の参加人数として N 大学附属幼稚園 5 歳児川組 24 名、小学 1 年生 31 名。

分析対象者として 5 歳児（年長児）A、D 君、小学 1 年生 K、N、O 君。

N 大学附属幼稚園の畑の前でなにやら子ども達が集まっているようだ。どうやら幼稚園の畑で、「サツマイモほり」が行われるようだ。

幼小の子どもが「サツマイモほりチーム」に分かれると、畑の周りに集まりスコップを持ち「サツマイモほり」が始まった。畑を掘ろうとするも畑の土は予想以上に固いためか、「掘れない」といった声が数々聞こえた。すると、幼稚園教諭は倉庫から 1m ほどの大きなスコップを用意し、子ども達と一緒にサツマイモを掘っていく。

「これなかなか抜けない。」と 5 歳児の A 君。どうやら、サツマイモのツルを見つけ、懸命にサツマイモのツルを上を引っ張り引き抜こうとしている様子。

「ちょっと、代わって。」と小学 1 年生の N 君。N 君も懸命に抜こうとするが、サツマイモの抜ける気配がない。「あかん。先生に頼んで掘ってもらお。」と小学 1 年生の N 君。①「うん。そうだね。〇〇先生。ここも掘って。」と幼稚園教諭を呼ぶ 5 歳児 A 君の姿があった。幼稚園の担任の先生が大きなスコップを使いながら、畑を掘っていく。ザクザク土が掘れる様子に②「掘れてる、掘れてる」と喜ぶ幼小の子ども達。

「うわ、虫がいる。気持ち悪い。」と小学 1 年生の K 君。どうやら、幼稚園の担任の先生が掘った土の中に茶色い芋虫が出てきたようである。「うわ、ほんまじゃ、気持ち悪い。」と小学 1 年生の O 君。この芋虫をどこに逃がすか幼小の子どもが相談していると、「芋虫さんは、草や木の葉っぱを食べて生きているんだよ。だから、草のある所へ逃がしてあげたらいいかもね。」と幼稚園教諭。「そうなんじゃ、わかった。」と芋虫を掴み、手の上に乗せる 5 歳児の D 君。「うわ、D 君、虫触れるの？」と小学 1 年生の K 君。③「うん。虫平気なんよ。この芋虫どこに逃がそうか。」と 5 歳児の D 君。「あのブランコの後ろの所、草がたくさん生えとるよ。」と小学 1 年生の O 君。④「あっ、あそこいいね。」と 5 歳児 D 君。5 歳児 D 君、小学 1 年生 K、O 君と一緒に、芋虫をブランコの草の所へ持っていくと、「このお花の葉っぱのところがいいな。」とお花の葉っぱの所に芋虫に乗せる 5 歳児 D 君。

「この葉っぱおいしそう。芋虫も喜ぶやろうな。」と小学 1 年生の K 君。⑤「ほんまじゃ」という 5 歳児の D 君の姿があった。

## (2) 考察

下線部①の、「うん。そうだね。〇〇先生。ここも掘って。」と幼稚園教諭を呼ぶ5歳児A君の姿から、小学1年生N君とサツマイモを抜くというという共通の目的を見だし、協力して活動する様子が窺える。また、5歳児A君の「うん。そうだね。」という言葉から、小学1年生のN君の出した意見の良さに気付きながら、受け入れていることも理解できる。吉田は異年齢保育について「年齢差・お互いの違い・多様性を知り、認め合っている。」<sup>22)</sup>と指摘している。本事例は特にこの指摘にある異年齢交流における他者の意見の良さに気付き認め合っていることに関連していると考えられる。以上の先行研究の指摘や本事例からも示唆されるように、幼小交流活動が保育内容「人間関係」の内容の「(7) 友達によさに気付き、一緒に活動する楽しさを味わう。」<sup>13)</sup>、「(8) 友達と楽しく活動する中で、共通の目的を見だし、工夫したり、協力したりなどする。」<sup>14)</sup>につながるものであると考えられる。

下線部②の、幼小の子どもたちが「掘れてる、掘れてる」と言い合う姿は、硬くて掘れない畑の土を幼稚園教諭が掘ることで、幼小の子どもたちの活動の中に幼稚園教諭が加わることになり、協力し活動に取り組んでいることを楽しんでいる気持ちが表れたものであると思われる。これによって、5歳児、小学1年生、幼稚園教諭が同じ目的を見だし、協力して活動し、活動を通して共に過ごす喜びを味わう様子が見て取れる。吉田は異年齢保育について「人と関わる楽しさを感じるようになる。」<sup>18)</sup>と指摘している。このことから異年齢の子ども同士の関わりは、人間関係を育む大きな機会を与えるものであることが示唆され、本事例の幼児と小学生の関わりもその機会となっていることが窺える。以上の先行研究の指摘や本事例からも示唆されるように、幼小交流活動が保育内容「人間関係」のねらいの「(2) 身近な人と親しみ、関わりを深め、工夫したり、協力したりして一緒に活動する楽しさを味わい、愛情や信頼感をもつ。」<sup>4)</sup>、内容の「(1) 先生や友達と共に過ごすことの喜びを味わう。」<sup>19)</sup>、「(8) 友達と楽しく活動する中で、共通の目的を見だし、工夫したり、協力したりなどする。」<sup>14)</sup>につながるものであると考えられる。

下線部③の、「うん。虫平気なんよ。この芋虫どこに逃がそうか。」と5歳児のD君が小学1年生K君に声をかける様子から、芋虫を畑から逃がすという共通の目的を見だし、芋虫を触ることのできない小学生K君の代わりに5歳児D君が芋虫を掴むことによって、協働して活動を展開していることが窺える。また、5歳児D君は、「活動の最中に、畑に芋虫がいると、芋虫の身に危険がある。」ということに気付き、考えた上で芋虫を掴むという行動を取ったと考えられる。吉田は「異年齢間の交遊関係を広げ・深めている。信頼関係が育つ。力を合わせる。」<sup>15)</sup>と指摘している。本事例は特にこの指摘の異年齢交流における力を合わせることを育むことに関連していると考えられる。以上の先行研究からも示唆されるように、幼小交流活動が保育内容「人間関係」の内容の「(2) 自分で考え、自分で行動する。」<sup>23)</sup>、「(8) 友達と楽しく活動する中で、共通の目的を見だし、工夫したり、協力したりなどする。」<sup>14)</sup>、「(9) よいことや悪いことがあることに



気付き、考えながら行動する。」<sup>24)</sup>につながるものであると考えられる。

下線部④の、小学1年生のO君の言葉に対し、「あっ、あそこいいね。」5歳児D君が答える姿から、芋虫を逃がすという共通の目的を持ちながら、協力し、小学1年生のO君の意見の良さに気付いている様子が窺える。吉田は異年齢保育について「葛藤も含め、人間関係の大切さ、信頼関係や助け合いの大切さ、子ども社会・社会のルールを学んでいる。」<sup>25)</sup>と指摘している。本事例は特にこの指摘にある異年齢交流における助け合うことの大切さを育むことに関連していると考えられる。以上の先行研究からも示唆されるように、幼小交流活動が保育内容「人間関係」の内容の「(7) 友達のよさに気付き、一緒に活動する楽しさを味わう。」<sup>13)</sup>、「(8) 友達と楽しく活動する中で、共通の目的を見だし、工夫したり、協力したりなどする。」<sup>14)</sup>につながるものであると考えられる。

下線部⑤の、「ほんまじゃ」という5歳児のD君の姿から、小学1年生K君と協力し、芋虫と一緒に逃がすことで小学1年生K君と共に喜びを共感していることが理解できる。また、5歳児D君は、小学1年生K君と芋虫を逃がすという目的を達成したことによって、協力し、物事をやり遂げることの大切さに気付いたのではないかと思われる。吉田は異年齢保育について「人と関わる楽しさを感じるようになる。」<sup>18)</sup>と指摘している。このことから異年齢の子ども同士の関わりは、人間関係を育む大きな機会を与えるものであることが示唆され、本事例の幼児と小学生の関わりもその機会となっているものと考えられる。以上の先行研究の指摘や本事例からも示唆されるように、幼小交流活動が保育内容「人間関係」の内容の「(4) いろいろな遊びを楽しみながら物事をやり遂げようとする気持ちをもつ。」<sup>20)</sup>、「(5) 友達と積極的にかかわりながら喜びや悲しみを共感し合う。」<sup>26)</sup>、「(7) 友達のよさに気付き、一緒に活動する楽しさを味わう。」<sup>13)</sup>、「(8) 友達と楽しく活動する中で、共通の目的を見だし、工夫したり、協力したりなどする。」<sup>14)</sup>につながるものであると考えられる。

#### (4) N大学附属幼稚園の幼小連携の交流活動の記録の分析

観察記録 事例4「はろういん」 2016/10/19

事例4は、N大学附属幼稚園5歳児とN大学附属小学校の小学1年生の幼小連携交流活動の事例である<sup>26)</sup>。

事例の参加人数としてN大学附属幼稚園5歳児川組24名、小学1年生31名。

分析対象者として、5歳児(年長児)2名、小学1年生2名。

サツマイモ掘りで収穫したサツマイモを幼稚園の遊戯室に運んだ。収穫したサツマイモを入れる箱には大、中、小と書かれており、これは幼小の子ども達が収穫した際に話し合い、サツマイモの大きさに応じてサツマイモを大、中、小の箱に入れられた物である。遊戯室に子ども達が集まり、収穫したサツマイモについて話し合いが行われた。まずサツマイ

モがいくつ取れたのか確認するために、幼稚園教諭が中心となりサツマイモを数えた。教諭と幼小の子ども達と一緒に数えた結果、サツマイモ大「69 個」、サツマイモ中「61 個」、サツマイモ小「85 個」という結果が出た。その結果をホワイトボードに書き込んでいく幼稚園教諭。

「じゃあサツマイモ大（69 個）とサツマイモ中（61 個）を合わせるといくつになるか分かる人？」とホワイトボードを指しながら幼小の子どもに問いかける幼稚園教諭。「んー、 $69+61$  だから 130 個」と小学 1 年生。

「じゃあ、130 個と 85 個を合わせるといくつになるか分かる？」と幼稚園教諭。「 $130+85$  だから 215 個」と答える小学 1 年生。①「わあ、サツマイモがそんなにあるんだ。」 ②「すごい。数えるの早いね。」と驚く様子の 5 歳児が見られた。

## (2) 考察

下線部①の、5 歳児の「サツマイモがそんなにあるんだ。」と驚く様子から、小学 1 年生、幼稚園教諭と協力し、取ったサツマイモを通して、喜びを味わう様子が窺える。また、5 歳児の驚く様子から、活動をやり遂げたという気持ちを改めて実感していることが窺え、この気持ちからこの活動が次回の活動に対し、最後まで活動をやり遂げる気持ちを育てることにも繋がるのではないかと考えられる。吉田は異年齢保育について「人と関わる楽しさを感じるようになる。」<sup>18)</sup>と指摘している。このことから異年齢の子ども同士の関わりは、人間関係を育む大きな機会を与えるものであることが示唆され、本事例の幼児と小学生の関わりもその機会となっているものと考えられる。以上の先行研究の指摘や本事例からも示唆されるように、幼小交流活動が保育内容「人間関係」の内容の「(1) 先生や友達と共に過ごすことの喜びを味わう。」<sup>19)</sup>、「(4) いろいろな遊びを楽しみながら物事をやり遂げようとする気持ちをもつ。」<sup>20)</sup>につながるものであると考えられる。

下線部②の、5 歳児の「数えるの早いね。」と驚く様子から、小学 1 年生のサツマイモの数を素早く計算することができることに感心していることが窺える。また、小学生が素早く計算し、数を表すことでサツマイモの数を明確にするという目的が達成できたため、5 歳児は他者と協力し、物事をやり遂げることの大切さに気付いたのではないかと考えられる。吉田は「異年齢間の交遊関係を広げ・深めている。」<sup>15)</sup>と指摘している。このことから異年齢の子ども同士の関わりは、人間関係を育む大きな機会を与えるものであることが示唆され、本事例の幼児と小学生の関わりもその機会となっているものと考えられる。以上の先行研究の指摘や本事例からも示唆されるように、幼小交流活動が保育内容「人間関係」の内容の「(4) いろいろな遊びを楽しみながら物事をやり遂げようとする気持ちをもつ。」<sup>20)</sup>、「(7) 友達のよさに気づき、一緒に活動する楽しさを味わう。」<sup>13)</sup>、「(8) 友達と楽しく活動する中で、共通の目的を見だし、工夫したり、協力した

りなどする。」<sup>14)</sup>につながるものであると考えられる。

#### 4. まとめと今後の課題

本研究では、幼小連携の「交流活動」が幼稚園教育要領（平成 29 年）「保育内容・人間関係」の「ねらい」、「内容」を達成させる有用な教育活動であるという視点から分析した。その結果、幼小連携の「交流活動」がこれらを達成させる有用な教育活動であることが示唆された。以下では幼小連携の「交流活動」での幼小の子どもたちの関わりから「保育内容・人間関係」の「ねらい」、「内容」が、どのように達成されたのか、主な項目を挙げてまとめる。

##### (1) 幼小連携「交流活動」における保育内容「人間関係」の分析から

- ① 保育内容「人間関係」のねらいの「(2) 身近な人と親しみ、関わりを深め、工夫したり、協力したりして一緒に活動する楽しさを味わい、愛情や信頼感をもつ。」<sup>4)</sup>

事例 1 下線部②において、慎重に取るトランプを選ぶ 5 歳児 A 君の様子から、トランプに勝つという目的を見だし、小学生の「トランプを取る時は、ババを取らんように相手の顔を見たらいい」というアドバイスの良さに気づき、参考にしながら「ババ抜き」で「ババ」を引かないためにはどのようにすれば良いのか考え、工夫し、小学生と協力し合いトランプ遊びを進めていることが理解できる。幼小交流活動が保育内容「人間関係」のねらいの「(2) 身近な人と親しみ、関わりを深め、工夫したり、協力したりして一緒に活動する楽しさを味わい、愛情や信頼感をもつ。」<sup>4)</sup>につながるものであると考えられる。

- ② 保育内容「人間関係」の内容の「(1) 先生や友達と共に過ごすことの喜びを味わう。」<sup>19)</sup>

事例 2 下線部①において、小学 5 年生 A ちゃんに対し、「うん。」と笑顔で返す 5 歳児 H ちゃんの姿から、小学 5 年生 A ちゃんと共に過ごす喜びを味わっていることが理解できる。このような関わりから、幼小交流活動が保育内容「人間関係」の内容の「(1) 先生や友達と共に過ごすことの喜びを味わう。」<sup>19)</sup>につながるものであると考えられる。この活動では 5 歳児にとっては小学 5 年生という「異年齢」の子どもと関わりを経験としていることになる。異年齢の子どもとの関わりは、地域の仲間集団の縮小化における人間関係の希薄さが指摘される現代では、貴重な体験であり 5 歳児の人との関わりを深める上で極めて重要なものになっていると考えられる。

- ③ 保育内容「人間関係」の内容の「(2) 自分で考え、自分で行動する。」<sup>23)</sup>

事例 3 下線部③において、「うん。虫平気なんよ。この芋虫どこに逃がそうか。」と 5 歳児の D 君が小学 1 年生 K 君に声をかける様子から、「活動の最中に、畑に芋虫がいると、芋虫の身に危

険がある。」ということに気付き、考えた上で芋虫を掴むという行動を取ったことが窺える。これらの関わりから、この活動が保育内容「人間関係」の内容の「(2) 自分で考え、自分で行動する。」<sup>23)</sup>につながるものであると考えられる。

④ 保育内容「人間関係」の内容の「(4) いろいろな遊びを楽しみながら物事をやり遂げようとする気持ちをもつ。」<sup>20)</sup>

事例3 下線部⑤において、「ほんまじゃ」という5歳児のD君の姿から、5歳児D君は、小学1年生K君と芋虫を逃がすという目的を達成したことによって、協力し、物事をやり遂げることの大切さに気付いた様子が窺える。これらの関わりから、この活動が保育内容「人間関係」の内容の「(4) いろいろな遊びを楽しみながら物事をやり遂げようとする気持ちをもつ。」<sup>20)</sup>につながるものであると考えられる。

⑤ 保育内容「人間関係」の内容の「(5) 友達と積極的にかかわりながら喜びや悲しみを共感し合う。」<sup>27)</sup>

事例3 下線部⑤において、「ほんまじゃ」という5歳児のD君の姿から、小学1年生K君と協力し、芋虫と一緒に逃がすことで小学1年生K君と共に喜びを共感していることが理解できる。このような関わりから、この幼小交流活動が保育内容「人間関係」の内容の「(5) 友達と積極的にかかわりながら喜びや悲しみを共感し合う。」<sup>27)</sup>につながるものであると考えられる。

⑥ 保育内容「人間関係」の内容の「(7) 友達のよさに気付き、一緒に活動する楽しさを味わう。」<sup>13)</sup>

事例4 下線部②において、5歳児の「数えるの早いね。」と驚く様子から、小学1年生のサツマイモの数を素早く計算することができることに感心していることが窺える。このことから、この幼小交流活動が保育内容「人間関係」の内容の「(7) 友達のよさに気付き、一緒に活動する楽しさを味わう。」<sup>13)</sup>につながるものであると考えられる。

⑦ 保育内容「人間関係」の内容の「(8) 友達と楽しく活動する中で、共通の目的を見だし、工夫したり、協力したりなどする。」<sup>14)</sup>

事例3 下線部③において、「うん。虫平気なんよ。この芋虫どこに逃がそうか。」と5歳児のD君が小学1年生K君に声をかける様子から、芋虫を畑から逃がすという共通の目的を見だし、芋虫を触ることのできない小学生K君の代わりに5歳児D君が芋虫を掴むことによって、協働して活動を展開していることが窺える。これらの関わりから、この活動が保育内容「人間関係」の内容の「(8) 友達と楽しく活動する中で、共通の目的を見だし、工夫したり、協力したりなどする。」<sup>14)</sup>につながるものであると考えられる。

⑧ 保育内容「人間関係」の内容の「(10) 友達との関わりを深め、思いやりをもつ。」<sup>16)</sup>

事例1 下線部③において、予期せぬことが起こり戸惑っている5年生を見て5歳児が「積み木はここに直したらいいんやで。」と声かけをしている様子から、5年生の戸惑う様子をみた5歳児が助言することで関わりを深め、思いやりをもって接していることが理解できる。これらの

関わりから、この活動が保育内容「人間関係」の内容の「(10) 友達との関わりを深め、思いやりをもつ。」<sup>16)</sup>につながるものであると考えられる。

これらのことから、幼小連携の「交流活動」が保育内容「人間関係」のねらいや内容に直接つながる教育活動であることが示唆された。

また、学校教育法第二十三条二項において「集団生活を通じて、喜んでこれに参加する態度を養うとともに家族や身近な人への信頼感を深め、自主、自律及び協同の精神並びに規範意識の芽生えを養うこと。」<sup>28)</sup>と記載されている。本事例は特にこの指摘にある幼小連携交流活動における身近な人への信頼感を深めることを育むことに関連していると考えられる有用な教育活動であることを示唆しているのではないだろうか。

## (2) 今後の課題

本研究では、幼小連携の「交流活動」が保育内容「人間関係」の「ねらい」、「内容」を達成させる有用な教育活動であることが示唆された。しかしながら、幼稚園教育要領（平成 29 年）の保育内容は「人間関係」以外に、「健康」、「環境」、「言葉」、「表現」の 4 つの領域が存在する。これらには、それぞれに具体的な「ねらい」、「内容」が存在する。幼小連携の「交流活動」の事例を分析する中で、「人間関係」の領域だけでなく、これら他の 4 つの領域の「ねらい」や「内容」を達成させるのに効果的であると考えられる活動内容も多々見られた。今後の研究では、幼小連携の「交流活動」がこれらの他領域の保育内容の「ねらい」、「内容」を達成させるためにも有用な教育活動であるかという視点でも分析し、それらを示す必要があると考えられる。これによって、幼小連携の「交流活動」にさらなる教育的な意義を見いだすことを課題とし、研究を進めていく。

## 引用文献

- 1) 河崎道夫・朝田かおり・北谷正子・杉澤久美子・西原信孝・藤本尚・松本敬子・山崎征子・山田康彦・吉田京子『幼小連携接続問題の実践的研究報告-児童間交流・教師間交流の取り組みを中心に-』三重大学教育実践総合センター紀要 23, 2003, 55 頁。
- 2) 河崎道夫・権部良子・浅田美知子・藤本尚・井本賢治・吉田京子『幼小連携接続問題の実践的研究報告その 3-児童間交流・教師間交流の取り組みを中心に-』三重大学教育実践総合センター紀要 25, 2005, 15 頁。
- 3) 前掲書, 15 頁。

- 4) 浅香俊二『幼稚園教育要領 保育所保育指針幼保連携型認定こども園教育・保育要領』チャイルド本社, 平成 29 年, 16 頁。
- 5) 姜華『幼小連携に関する政策と理念についての一考察-中央教育審議会答申と幼稚園教育要領を中心に-』早稲田大学大学院教育学研究科紀要 20 号, 2012, 67-78 頁。
- 6) 井上千恵子『子ども同士の学び合う場となる交流の在り方』日本保育学会発表論文集 55, 2002, 186-187 頁。
- 7) 木下光二『育ちと学びをつなげる幼小連携—小学校教頭が幼稚園へとび込んだ 2 年間—』チャイルド本社, 2010。
- 8) 谷口聖『幼小連携における交流活動の教育的意義に関する一考察—異年齢間のソーシャルサポートのかかわり—』鳴門教育大学大学院修士論文, 2016, 25-28 頁。
- 9) 前掲書。
- 10) 前掲書, 9-10 頁。
- 11) 吉田行男『札幌市及び周辺地域における異年齢保育の実態調査報告書』北海道大学大学院教育研究科, 乳幼児発達論研究グループ, 2009, 13 頁, 14 頁。
- 12) 山本理絵・藤井貴子『人間関係に困難を抱える幼児の異年齢保育における支援 (1)』愛知県立大学教育福祉学部論集, 第 63 号, 2014, 109 頁。
- 13) 前掲書, 17 頁。
- 14) 前掲書, 17 頁。
- 15) 前掲書, 14 頁。
- 16) 前掲書, 17 頁。
- 17) 前掲書, 22 頁。
- 18) 前掲書, 13 頁。
- 19) 前掲書, 17 頁。
- 20) 前掲書, 17 頁。
- 21) 前掲書, 25 頁。
- 22) 前掲書, 13 頁。
- 23) 前掲書, 17 頁。
- 24) 前掲書, 17 頁。
- 25) 前掲書, 14 頁。
- 26) 前掲書, 29 頁。
- 27) 前掲書, 17 頁。
- 28) 「保育小六法」ミネルヴァ書房編集部, 2017, 223 頁。